

---

# この世で最も下卑た魔術師

sukesuke

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この世で最も下卑た魔術師

### 【著者名】

NZマーク

N5254Y

### 【作者名】

sukessuke

### 【あらすじ】

少年は、ただ空だけを見ていた。処刑台までの道のりで少年は思い出す。

自らの罪を顧みながら思い出す。  
自らの罪の軌跡を。

## 処刑台までの道のりで（前書き）

初めての投稿なのでよろしくお願ひします。  
なお題名は、召喚獣ですが召喚獣はじまへ出できません。  
あしからず。

## 処刑台までの道のりで

空が青かった。自分の見る最後の空だといつに吸い込まれるような青色だった。

あれほどの事があつたのに、それらを忘れてしまったのに吸い込まれいつも道理に澄み渡つている。

自分とかかわった人々すべてを不幸にして自分の歩いてきた道には、数えきれないほどの死体の山を築いてきた。  
唯一無二の親友を裏切り、こんな自分に好意を抱いてくれていた人にはその好意を利用して切り捨てた。

大を生かすために小を殺し続けた自分には今月末路がお似合いだとも感じてる。

自分の犯した罪を自分の死によつて清算できるかどうかは、わからぬ。

キリストは、処刑台まで自らを磔にする十字架を運ばされたというが、今の自分には上台無理な話だった。

なくしてから初めて氣付くもの、今の自分には、四肢がなかつた。

腕は、肘から上が脚は、太ももから下がきれいに切り取られていた。だから今は自分を殺すであろう黒い覆面を被つた大男の肩に担がれて、小高い丘の上に立つ十字架のところまでなすすべなく運ばれようとしていた。

四肢があつたところで抵抗する気もなかつたが、今はただ青い空だけを眺めていたかつた。

この世界に生を受けた時とかわらぬこの世を。

やがて俺はこの世界に転生した時のことを探し出す。

母の躰の軌跡を

処刑台までの道のりで（後書き）

誤字脱字、などあれば教えてください。

## プロローグ すべての始まり

それは、生まれた時から一つだった。それは、その聰明な頭で、生まれたときから理解していた。

自分は一つだと、一つしかない種族で一つしかいない種族だと

途方もない時間の間孤独だった。

それは、孤独のあまり一つの新たな種族を作った。

その種族は、瞬く間に地に広がり増えた。

その間に種族たちが、愚かしくも互いを傷つけて滅び去るのも何度も見た。

世界の安寧を願いそれは、世界に原初の闇をかけた。

それから再び長い時が流れた。

そしてそれは、悠久とも取れる長い時間をかけてその種族の世界の闇がはれ光が満ちはじめているを感じた。

そしてそれは、動き出す。

世界を再びを暗い闇で包み込むために。

## 「誕生」

結果から簡潔にいふと、この俺小澤悠太は、享年17歳で死んだ。

日々の行いは、悪くなかったほうだと自負しているが、この世界のどつかにいる神様には、嫌われていたらしい。

とにも、かくにも、17歳の時、俺は正面から突っ込んできた大型のダンプに轢かれてミンチになった。

どのぐらいいたつただろうか、どこか温かい水に包まれてひたすら寝て起きてを繰り繰り返していたような気がする。

浅い夢、深い夢。

それらを交互に繰り返して俺は、血の身体が覚醒に近づいていくのを感じた。

知覚したといつても思考したのではなく本能的に感じたのである。

そうしてしばらくたった頃、突然頭に甘く鈍い痛みを感じた。

痛みは、額を伝ってうなじに流れ背中を通り踵まで達した。

その痛みの伝導が終わった瞬間。

今度は身体が一気に覚醒に傾く、先ほどの甘く鈍い痛みではなく悲鳴を上げたくなるような激痛。体を覆っていた水が流れ出し、それと同時に体が押し出される。頭、首、肩、胴体、腰、脚から足そして踵、つま先。

身体がすべて外に出て俺が初めに感じたことは、衝撃、光、匂い、感触、すべてを同時に感じた。

最後の衝撃によって自分で何かが外れ俺は、泣き出しちゃった。

もちろん17歳男子の臭い泣き声ではなくて、

「オギヤ———

ところ赤ん坊の泣き声である。

自分が生まれてどのぐらいたつただろうか、ふと目を覚ますと大人たちが怖い顔して駆け回っている。

何かあつたのかな、などと考えているときれいな金髪碧眼女性が生まれたばかり俺の身体に毛布をまいて俺を抱いてどこかに運ぶ。

生まれたばかりの俺をどこに連れて行くのだろうか？

そこまで考えると考えるのがめんべくくなつてまた寝た。

ひとり、ひとり、俺の顔に温かいしづくが落ちる。それによつて目を覚ました俺は、先ほどの女性が泣いているのが見えた。

今思えばこの人が俺の母親だったのかもしれない。

なぜ「かもしれない」になるのか。

結果から言つと俺は捨てられた。毛布に包まれたまま俺は、魔物の巣食う森に置き去りにされたのだった。

## 「出会ご」その一

小澤悠太前世では、ダンプにひかれて享年17歳で死亡。

なぜか生まれ変わつても前世の記憶持つたままでただ今、絶賛赤ん坊ライフを満喫中。

吾輩は赤ん坊であるまだ名前はない。なんちゃってな！

生まれ変わつたのはいいけれどなんでか生まれてすぐ捨てられてしまつた。毛布に包まれたまま魔物の森に置き去りにされた。人でなしか！

そんな感じで人生初めての命の危機を生後三時間で体験しちまつたぜ。いやっほう！全然嬉しくねえ

そんな時、俺を助けてくれたのが今の俺の育ての親。でつかいドラゴンなんだ。

いやドラゴンだぜドラゴン、なんでか知らねえけど魔物に襲われそうになつたとき空からバツて現われてシユツてやさしく俺のことをつかんでそしてズサーーッて感じで俺のことを空に連れ去つた。

まさに三拍子バツ、シユツ、ズサーーッて感じ、ちょっと待てズサアアアアアアで感じかも。

まあつまりこの時俺は、3つのことを考えてた。

一つ目は、魔物を見たときは、あんまり感じなかつたけれどドラゴ

ン見たときえらくファンタジーっぽい世界に来てんなどスゲー感じた。魔法とかもあんのかなワクワク。

一いつ旦は、命の危険を感じたのも生後三時間だが初めてのSKIHIGHも生まれて三時間だつたぜ。いやほうーうん、じつけやはつほう！

あつスペル間違えた。

そして栄光の三つ目は、パンパカバーン。現在進行中で生命の危険ありつてことだあああああ！

そしてドラゴンは、羽を広げ制動かけて着陸態勢に入る。そしてドッカーノンで感じで着陸。

ちなみに俺は着陸のとき思いつき泣き叫んでしまった。もううるさいわーー、ではなくオギャーー、である。

そんな感じで着陸したドラゴンはそっと俺のことを地面に降ろし優しく俺に囁いた。

囁くというよりも響くのほうが正しいかもしない。その声は、優しく俺の中に響いた。

(今あなたには、理解できないかもしない。ただ引き寄せられたというよりも気が付いたらあなたのことを助けていた。私たち誇り高い竜の血族は、運命と血のつながりを最も信奉している。あなたから運命のつながりを感じた。だからあなたは、私の子。我が子よ今は眠りなさい。あなたのことは、この誇り高き竜の血統の一人、

イーリス＝ハイドヴェルトがあなたのことを守ります（

この言葉の後俺は、意識を失った。

「うおしゃつあああああああーやああああつてやんせええええ  
！」

俺は両「じぶし」を構えると自らを取り囲む魔物の群れに向かつて走り出した。

右「じぶし」を振ると魔物がドカーンと吹っ飛び左「じぶし」を振るとズバーン吹っ飛ぶ。

かくあれ、10分後には取り囲んでいた魔物の掃討が終了し帰宅の途に就く。

「火竜山脈北東方面制圧終了」。まあこれで東西南北全部制圧したなんじゃ帰るか。」

来た道をダッシュで帰る。それでも帰るのに10日はかかるがな。

俺が捨てられて14、5年たったかな？正確な時間はわからぬが体感だと大体そのぐらいである。

捨てられて、火竜山脈の女王である今の母さんに捨てられて育てられて14、5年たつということでもある。初めのうちはビビついてたが（赤ん坊の姿である）慣れとは恐ろしいものでドラゴンの育てられるのにも慣れてしまった。というより赤ん坊だったのでなされるままだったというのもある。

まあそんなこんなで5歳になるまで丁寧に育てられた。そういうえば五歳になるまでも元の世界じゃありえないことがいくつもあった。まず物を食べる必要がなくなつた、これは母さんが言つてしまつた。

(我が子と私では食べるものが違うので生氣として私の栄養を直接流し込んだ。だから体が慣れて自ら周りから取り込むことができるようになつたのかもしない)

だそうだ。

今は呼吸をするように周りから吸収している。

後はこれもやつぱり驚異的な身体能力の高さだらうか。

脚だけはすごく速くて50メートルを2、3秒で駆け抜けてる気がする。

そんなこんなで5歳からは体ができたので一人だちする教育を受けってきた。サバイバル技術や歴史、料理その他もうもうの生きるために必要な知識経験を積まされた。

これ母さんが時期が来ればこの火竜山脈から出て行けと言つているのに他ならない。

経験はともかく知識はここにいるつえでは使わないからな。

そこで三か月前にはとうとう魔法を習い始めた、が肉体のスペックは高いのに魔法の才能は何一つなかつた。火、水、氷、土、風、雷、光、闇どれをとっても発動しなかつた。

これについては母さん曰く。（魔力の保有量は一般的な人間族を離れてもはや竜族わたしに近いのに発動しないのはおかしい。普通どんな生物で知性さえあれば魔法が使えるるはずなのに）だそうだ。

これについてなら思い当たることはある。これって俺が異世界の記憶持つまま転生したからじゃね。

ということできちんと決めたのが2週間前それからこの火竜山脈に繩張りを持つ魔物共に片っ端から喧嘩吹つかけて火竜山脈統一を目指した。

そんでもってそれを完了させたのが五分前ついせきである。

そんなこんなでやることを失くした俺は意気揚々と母さんのところに戻りうとしたのだがたった今とんでもないことの気が付いた。

生まれてこの方そこまで遠出したことなかつたもので

「え、 いいじゃん？」

不肖14、5歳迷子になりました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5254y/>

---

この世で最も下卑た魔術師

2011年12月29日23時48分発行